

## アブノーマライゼーション宣言解説(報告要旨)

発達障害当事者 高森明

### 【はじめに】

本報告では、宣言の経緯、あるいは宣言を通じてどんなことを問題提起しようとしたのか、といった点について簡単な解説を行いたい。

### 1. ■宣言者の生い立ち

宣言者は、1975年に帝王切開で生まれた。生まれた時点で〈水頭症〉を疑われたが、〈水頭症〉ではなかった。その後運動発達と対人反応の少なさから〈視覚障害〉、〈自閉症〉、〈微細脳機能障害〉、〈学習障害〉などを疑われたが、原因も診断もはっきりしなかった。5歳から9歳までは都内の重度心身障害児施設で運動発達の相談を受けていた。

けっきょく、26歳の時に〈アスペルガー症候群〉と診断され、最近〈自閉症スペクトラム障害〉という診断に変更され、現在に至る。

宣言者自身が何らかの〈障害〉を疑われていたこと、家族の中に学生運動が盛んだった時代に女性の中絶問題に関わっていた者がいたため、幼少時の宣言者の家には肢体不自由者や障害者運動の支持者たちがよく遊びに来ていた。彼女／彼らの間では〈障害〉を理由にした選択的中絶の議論が飛び交っていた。この時の議論の意味は、大学院生時代に生命倫理学の講義を受け、理解した。

### 2. 宣言の経緯

20代の頃の宣言者は、〈障害者〉を人間から生まれた〈変異体〉と捉えていた。そして、「人間から生まれた〈変異体〉が人間であるか否かは誰によって承認されるのか」「その上で人間と承認された〈変異体〉の生の様式を人間に近づけていくという方向性が妥当なのか」という問いに絡めとられるようになった。

考えれば考えるほど、宣言者は自らが人間の一員と承認されていることに救いを見いだせなくなった。それが〈人間らしさの実現〉という理念を、問題化しようと考えたきっかけである。

### 3. 何を問題化したのか

宣言者が問題化しようとした〈人間らしさの実現〉とは、(1)人間として望ましい健康、機能(能力)、形態の獲得(2)人間としての行動、価値観、立ち振る舞いの獲得(3)人間としての当り前の生活の実現(4)人権、人間としての承認に分かれる。

宣言の特異性は(4)人権、人間としての承認も串刺しに問題化した点にある。

なお、宣言者が〈人間らしさの実現〉を目指す行動原理と捉えたのは、「ノーマライゼーション」、「インクルージョン」、「メインストリーミング」、「ユニヴァーサル社会」、「人間の安全保障」であった。

### 4. 人権／人間としての承認の否定

宣言第1条(1)(2)においては、すでに人間の一員と無条件に承認されている者が、人間から生まれた変異体を人間の一員として承認する行為自体を否定した。〈人間としての承認〉は、既に生まれ、誰からも人間の一員として無条件に承認されている者しか行うことができず、承認する者とされる者の関係自体がすでに非対称的であらざるを得ないからであ

る。

そして、第1条(3)においては、変異体をヒトから新しい種が枝分かれする時に発生する中間種であり、〈人間の次にくるもの〉と捉え、その持続的な生を実現するための行動原理を作ろうとした。

## 5. ■生の様式の問題化

人間の一員になるという目標が放棄されると、〈人間の生の様式〉を目指すという目的自体も再考を迫られることになる。

〈人間の生の様式〉という枠組を撤廃した上で、持続的な生を目指した時、どんな生活や生の技法が生み出されていくのか、答えはまだ出すことができていない。

## 6. 宣言という行為に対する問題化

アブノーマライゼーション宣言は宣言と名乗りながら、宣言という行為を問題化しているところがある。

宣言という行為には、ある社会集団が共通の理念や行動原理を作り、集団の外部や内部に向かって発信するという目的が含まれていると考えられる。しかし、共通の理念や行動原理をまとめる過程で、その集団のメンバーが共有している価値観から明らかにかけ離れた思考、発想は除外されてしまうことがある。

1948年に国連で世界人権宣言が採択された後、様々な宣言において、人間性、人格、人権の尊重などは重要な地位を占めるようになったが、〈人間らしさの実現〉も自らの価値観からかけ離れた思考、発想を除外してしまうという点では例外ではない。

排除された思考、発想を最大限に利用して、〈人間らしさの実現〉という理念を土台にした宣言を攪乱し、揺さぶることが、アブノーマライゼーション宣言のもう一つの重要な意味だったと考える。

## 7. 反響はどうだったか

宣言に対して反発した関係者は主に人権／人間としての承認の否定という部分に納得ができなかった。また、当事者、家族のからは〈人間の次にくるもの〉になるという発想にショックを受けたというご意見を多数頂いた。

他方、〈人間らしさの実現〉という行動原理の護教論化、濫用、あるいはどんな崇高な行動原理も排他的な側面を持つという問題に気がついている関係者は、宣言に対して共感的な意見を表明する場合が見られた。